

「確率」の「あいまいさ」

出口康夫（京都大学）

数学・科学の術語・概念としての「確率」は、一見「あいまいさ」とは無縁のようにも思える。だが、（客観的な出来事であれ、主観的な信念であれ）現実の対象へと適用される際に、「確率」概念はさまざまな意味での「あいまいさ」を抱え込むことになる。

例えば、ある事象の「確率」の具体的な値の一意的な特定は、そもそも不可能である。特定の事象の確率値は、つねに（大かれ少なかれ）恣意的な仕方設定された「一定の範囲」によってでしか表現できないのである。このことは、「特定の事象（ないし信念）の確率値」という概念自体が「あいまい」であることを意味している。

さらに、ある事象が（主観的意味であれ客観的意味であれ）「確率事象」と呼びうるかどうか、これまた「あいまい」な事柄である。言い換えると、「確率事象」という概念も「あいまい」な概念なのである。

また近年、ベイズ法では、マルコフ連鎖モンテカルロ法を用いたコンピューター・シミュレーションが広範に用いられている。というより、コンピューターの発達と普及に伴いモンテカルロ法と結びつくことではじめて、ベイズ法は一人前の統計的方法論と呼ぶにふさわしい汎用性を獲得したとも言える。だがそのことで、ベイズ法には、より一層の「あいまいさ」が付き纏うことになったと見なすこともできる。

本発表では、このようなベイズ法を巡る最新の研究動向をも踏まえつつ、「確率」概念の持つ「あいまいさ」を見定め、そのことが、「ソライティーズ・パラドックス」に象徴される、「あいまいさ」を巡る哲学的な問題に対して、どのような含意を持ちうるのかを考えてみたい。